

2018 春の校外研修・大谷石の故郷を訪ねる旅

旅の豆知識

大谷石 :



日本列島の大半がまだ海中にあった新生代第三紀の前半(2000万年前)、火山が噴火して噴出した火山灰や砂礫が海水中に沈殿し、それが凝固してできたものとされています。

軽くて軟らかいため加工しやすく、さらに耐火性・蓄熱性・吸湿性・消臭効果・音響効果に優れているので、住宅(かまど、石塀・防火壁、門柱など)蔵や倉庫、斜面土止め石、パンやピザを焼く窯、店舗や音楽ホールの内装など、幅広く用いられています。

多孔質の独特な風合いが広く知られるようになった、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが、帝国ホテル旧本館(東京・名古屋の明治村に移築)に用いてからとされています。



大谷寺 :



縄文時代早期の横穴式住居だと考えられる洞窟が「大谷寺岩陰遺跡」として保存されていて、およそ一万一千年前のものとされる人骨が出土、宝物館に実物が展示されています。

弘仁元年(810年)に空海が千手観音を刻んでこの寺を開いたとの伝承が残ることなどから、千手観音が造立された平安時代中期には「周辺住民等の信仰の地」となっていたものと推定されています。

お寺は、大谷石の洞穴内に堂宇を配する珍しい洞窟寺院で、ご本尊は、「大谷観音」の名で知られている、凝灰岩の岩壁に彫られた丈六(約4.5メートル)の千手観音様です。

平安末期には、今も残る主要な磨崖仏の造立がほぼ完了、鎌倉時代に入ると、有力御家人でもあった下野宇都宮氏の保護の下で隆盛したと見られ、鎌倉時代の懸仏、1363年(貞治2年又は正平18年)奉納の経石、1551年(天文20年)と書かれた銅椀などが出土しています。